

# やくわえ

特集号

## お帰りなさい大神宮さま

小笠原に日本人の心の魂が宿る

本島の歴史はポニアイランドからもわるる様に長い間無人島であった。一五九三年信州深志の城主小笠原貞頼により発見され、その後一八三〇年頃より西洋人の寄島と共に定住者もあらわれ、第二次大戦前には七〇〇〇人の人口を数えた。その後大戦の戦禍は激しく、住民は強制疎開で内地に移り住み、戦後は米軍の占領下に置かれた。

その後全国民の熱意が結集し、昭和四十三年四月には待望の返還調印がなされた。この間放置された境内地、農地等すべてが、ジャングルと化し現在その復興を急いでおる。

又、神社界に於ても、まず島民の心の支えとなる神社の復興計画がもたらされ、直ちに東京都神社庁が御復興の準備を進めていた。その結果この程新装された御社殿を現地に運び、遷座祭執行の運びとなった。

今や、島内では、小笠原諸島復興計画に従い、旧島民の帰島も月日と共に増し、荒廃した島内の復興に全力を挙げている。

しかし、この計画は島民の物質的優遇措置優先が主体となり、太平洋の孤島に生活する島民の精神的不安の解消策には、欠けている。高度の機械文明に浸され、公害に悩まされる吾々から見れば、そこは地上の楽園かも知れないが、人間社会には一つの精神的秩序が必要であり、支柱となるものが必要である。その支柱となるべきシンボルが神社であり、その信仰であろう。

小笠原諸島の中心、父島二見港の小高い山の上の境内に二十七年ぶりに、明りがともり神々が宿った。

境内の眼下には白亜のプレハブ造りの粗末な建物が緑の芝生に映えて点々と散らばり、そのままエメラルド色に輝く二見港に吸い込まれ、周囲は熱帯植物に覆われた小高い山々が連なり、絶景を描く。

この素晴らしい自然は人間性を回復するに誠に相応しい。そこに住む島民が氏神を中心に一致団結し、他に類を見ぬ健全で明るい島を造り上げる様祈る次第である。

(大鳥居記)

### 大神山神社御復興報告

会長 北川 正保

昭和四十二年十一月五日小笠原諸島返還日米共同声明が出され、翌年の四月五日日本国民待望の返還調印が行なわれた。

思えば、南方、北方領土の復帰要求の運動は神青協歴代先輩諸兄により一環事業として推進して参ったわけである。その成果として、小笠原、沖繩の本土復帰が成った。先輩諸兄の熱意ある運動展開を見習い、茲に吾々は、北方領土復帰推進運動を更に、強力に展開して参らなければならぬことを、痛切に感じる次第である。

さて、昭和四十三年六月本土に復帰した小笠原諸島も東京都に帰管され、日夜開発の途上にある。旧島民も逐次故郷に帰島平和な村造りが行われて居る。

島民も次第にその数を増すに従い、日本人の心のふるさととしての、神社復帰を願う声が高まり、東京都神社庁としてもその念願に答うべく、全面的に協力をし、特任宮司を拜し、法規上の手続きも

すべて終え、御遷座の準備を調えたのである。

本会としても、神社庁の方針に従い微力ながら協力をして参ったが、このたび、小笠原大神山神社遷座奉仕団に同行の依頼を受け心よくお引受致したのである。

また、本会員の中よりこの記念すべき御遷座に対し、何らかの事業を行うべき旨の、発言を戴き、数回の会合の結果、大神山神社復興記念碑を境内に建立することに決った。

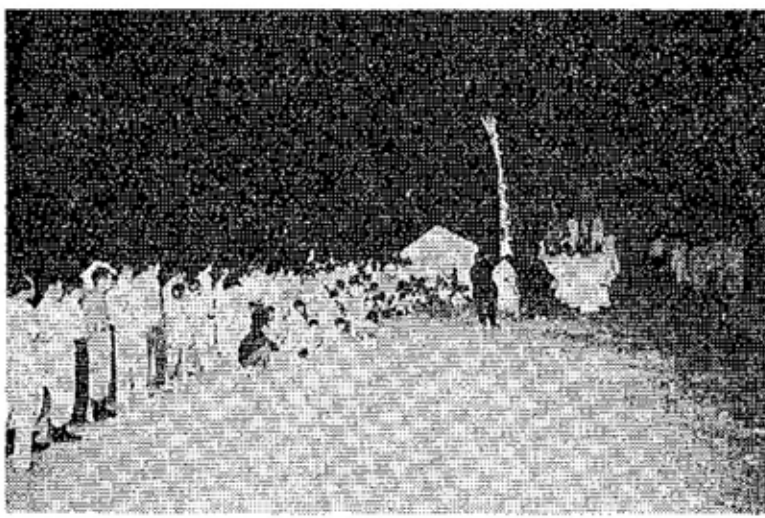
直ちに、募金活動に入った処、各区委員の協力により初期の目標



に速やかに達し、多額の浄財を寄せられたのである。

さらに、小笠原復帰と共に託された石川県神道青年会の好意を記念碑の裏面に本会名と共に刻み交友を温めることができたことは、誠に喜ばしく、感謝申し上げます。第です。

その後、北多摩青年神職会「むらさき会」を始め、神奈川県神道青年会等より、本会に寄せられた多額の御好意は、本会の記念碑建立募金の残金と共に、大神山神社へ、総て御奉納させて頂きましたことを、御報告申し上げますと共に



深甚より御礼申し上げます。

本会員より奉仕団を募り、先発隊として滝渉外部長、浜中、山口両委員にお引受けを戴き、神明造りの御社殿並びに復興記念碑と共に出発、社殿の据付、参道の整備島民との諸集会等万事滞り無く準備、その奮闘に対し敬意を表します。

続いて十月二十五日には本隊が御霊代を奉持し高橋宮司以下神社庁役員の方々に、小生、松本、大島居両副会長が同行し出発致しました。

別記の通り、御遷座祭、奉祝祭、記念碑除幕式等の祭典及び行事も盛大厳粛裡に終え、全員任務を果し十一日一日に無事帰京致すことができました。

今後の大神山神社維持、運営、島民教化等、数々の残された難題に対し、吾々は、若さをもって御奉仕でき得ることに、全力をあげて協力して参らなくては、ならないだらう。

終りに本会の記念碑建立計画に御賛同下さいました多くの方々に、対し厚く御礼申し上げますと共に、本紙面を以って御報告に変えさせて戴きます。

## 正副会長

## 不在一週間

藏 重 命 史

十月二十五日の椿丸出航の見送りの際、神様の召します天鳥船ということも連想されて、何となく洋々たる胸のふくらむ気持であった。

それでも二昼夜に亘る船旅が、心快く波静かに、めでたく御鎮座という大任を果されて帰京されることを祈るばかりであった。

果せるかな二十七日早朝、北川会長から一同元気で着いたという電話があった。祭典の準備に忙殺されて居られるのに、よく気を配る会長だと感心させられた。

二十八日に例大祭を済ませて、三十日に帰京する予定であったので、それぞれに出迎えの事を連絡して居ると、二十九日の朝まだき大鳥居庁長さんから「小笠原から三十一日の午前七時に竹芝棧橋に到着するから、然る可く手配を」との電話があった。二十六号台風のためかと要所に問い合せて居ると、今度は神社庁より台風のため

に帰京が遅れるとの知らせを聞いたので、急に不安が募っていった。

その上、一日の七時となったのが小笠原海運に電話を入れると九時に着くという。内心穏やかでなく再び電話で問い合せると十時に着くというテープの答えが返って来た。

結局は九時半に着港したのだが全く慌しい限りであった。

私も沖繩返還の日、石垣島から波照間に渡った船の四時間、大揺れに揺られて、困憊の極を味わったことがあり、会長一行の身体に気を遣っていたのだが、元気に手を振って近づいて来た姿を見たとき御神慮の深さを感謝した。



…座談会…  
**大神山神社御復興に  
 奉仕して**

出席者

- 会長 北川 正保
- 副会長 松本 美昭
- 副会長 大島居信史
- 渉外部長 滝 実
- 委員 浜中 厚生
- 委員 山口 直和
- 総務部長 蔵重 命史
- 司会 神尾 恭三

司会 今日では都神青として神社庁に協力し、小笠原大神山神社御復興に直接奉仕してこられた方々にお集り戴き、その印象や苦勞話といったものをお聞かせ願いたいのですが、先づ会長より簡単にこの行事の説明を。

北川 この問題は神青協として全国的に執り上げられて来ていたものですが、今回神社庁として計画していました大神山神社御復興計画に我々青年会として協力し参加させて戴くよう、主として前八木会長時代から渉外部

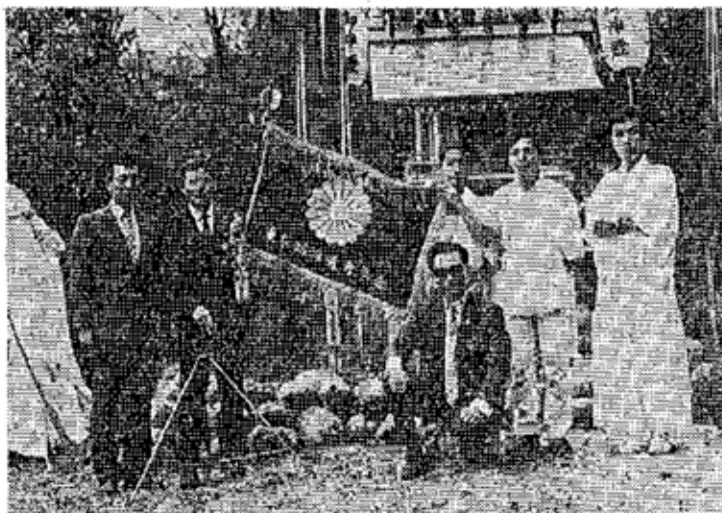
長としてこの問題を担当してきてた滝さんが神社庁側と接渉し、心良く了承され、我々としては御奉仕させて戴けるんだという気持ちで参加した訳です。

司会 そこで先発隊として滝、浜中、山口の三君が行かれた訳ですが、後発隊の着くまでの間色々な仕事があったと思いますが

滝 渉外部の担当として、私は新倉主事と浜中、山口両君と十月十八日に出発、その時に御社殿と会員の協力によって出来ました記念碑と一緒に積んで行った訳です。途中新倉主事と浜中君は元気でしたが、私と山口君はまるで冷凍マグロみたいで船底にへばりついてごろごろしていました。それで四十五時間かかって二十日の朝向こうに着きました。一まづ宿舎で小休止しましたが、その日の内に社殿と記念碑を据える工事を地元の建設業者によってやった訳ですが、大体どの程度の時間がかかるものか心配だったので、幸いなことに到着したその日の内に済みましたので、その後の日程がスムーズに行きました。翌日は支庁に来島の挨拶旁々、我々

の目的を説明し協力方をお願いする意味も含めて行ったのですが…

浜中 最初の内、島民の協力がなかったような印象をうけました滝 とにかく着いたときはだれもいなかった。我々は生れて初めていった所でどこへ行ったら良いかわからず、炎天下に小一時間立っていたという状態で、非常に心細かったのですが、実際は島民の老人会という組織もあり、島の人たちが社殿復興ということに非常に積極的にやっています、我々の到着する前から



う作業を開始していて、二十八年間ほりつぱなしにしてあった神社の石段にしる、道にしるひどい状態だったらしいのですが、かなり整備されていました

山口 でも、お宮を上げるときはブルドーザーで急場に造った道で、しかも樹がうっそうと茂っているので大変でした。馬櫓のような形で約一時間程かかってお宮と記念碑を上げ、何とかその日の内に終った訳です。

滝 我々が先発に行つて一つの心配だった仕事は片づいてほっとしました。

松本 よくあれだけの仕事は半日で終りましたね。

滝 社殿の土台はもう既に出来ていましたから。

司会 すると先発隊の仕事として翌日からはどんなことをしたのですか。

山口 島の人たちが我々を信用していない感じがあったので、島の人たち、特に老人たちと村民会館でお祭りの主旨など色々説明をしたので理解をして呉れて神社の周囲特に階段などは雑にやっていたのですが、話し合いが済んでからは絹垣が通れる

ように大きく木を切ったりして驚くほどきれいにやって呉れました。

司会 初めに我々に対して理解してもらえなかったというのは、どうしてですか。

北川 PR不足ということもあったのでしようね。

浜中 それと色々な関係からお宮を取られてしまうのではないかと、という考えもあったようです。素朴な人たちですから……

北川 また観光業者などが小笠原を狙っているということから、そういうものに利用されるのではないかと、という気持ちもあったでしょう。

浜中 神社庁自体もそういう目で見られていたようですね。

大鳥居 そういう点で後発でいった理事の方々も随分気を使ってあまりでしゃばると島の人たちが変に思うのではないかと気を配っていた様です。

司会 純粹にお宮を再建して神さまをお祀りするんだという事で奉仕をしているという我々の意志が通じなかったということですね。

大鳥居 結果においては通じたわ

げです。

北川 それには新倉主事はじめ先発でいった人たちが昼間は重労働、夜は会議という中で向こうの人たちに理解してもらったということですか。

滝 くわしく説明しますと、着いた翌日から公民会館で第一回の会合をもったのですが、今までの経過説明から遷座祭奉祝祭の日程について協議したり、村の人たちから自分たちはこういうことをやるから、我々にこうしてほしいといった要望を聞いたり、話し合ったりしたわけです。そうした会合をくり返えしながら村の人たちと接触し、その間協力して境内の整備をしていったわけですが。

司会 具体的にどういうことを。山口 社殿の囲りに石垣を作ったり、玉石を積んだりしたのですが、石が重いしこれが仲々大変で結構時間がかかりました。簡単にやったらすぐ崩れてしましますし、そういうことが沢山ありました。

大鳥居 行ってみて確かに綺麗になっっていました。

滝 社殿の土台は本職がやって立

派に出来ているのですが、囲りがみっともないので石垣作りをやったのですが、その外参道の清掃にしても、横幕作りや轆り作りや計算外の用事が予定した倍以上ありました。

司会 後発で行った人たちは、先づどんな印象を受けましたか。

北川 今までの話を聞くと大神山神社について当初はあまり関心がなかったということですが、我々が行ったときは「お帰りなさい金刀比羅宮 大神宮 水天宮」という大きな幕を持って、島の人たちが迎えて呉れた訳です。又、漁船で新倉主事と山口君が白衣で御霊を乗せた椿丸を迎えに出てくれたのですが、その時四十数時間船にゆられて来た我々はほっとして救われた気持ちと、島の人たちから歓迎されたということに感動しました。

司会 それは先発隊の努力が実っていったということですね。北川 それとまた、先発隊が行ってから村の人たちの中から寄附を募ろうという話になり、早速やったらいいのですが、たった一晚で百数十万の金が集まったというのです。この残金は大神

山神社の維持運営の資金として島の人たちが管理しているのですが——これは小さい島の内ですから結束が固いということも言えますね。

司会 島の人口はどのくらいですか。

滝 島民と言える人は六百名ぐらいで、あとは官公庁の人と復興計画にしたがって来た建設業者を合わせて四百名位、合計千名ちよつとですね。ですから我々が二十五日お祭のポスターを貼ったのですが、その時にはお宮が出来たことと遷座祭が二十七日の夜あるということには全部の人が知っていました。

大鳥居 今の人数からすると遷座祭の時に約三百名位の参拝があったのですが、在来島民の約半数が祭典に参加したということが言えますね。

山口 確かに今までどこにこんな人が大勢いたのかと思う程集って来たので驚きました。

歳重 それは私が波照間に行った時と同じようですね。やはり祭典の時は島の三分の二以上の人 がトラックに乗って集って来て除幕式に参加しました。又、初

めは懐疑的だったのが、人と接触するにつれて溶け込んでいって次第に解って呉れるようになってきました。

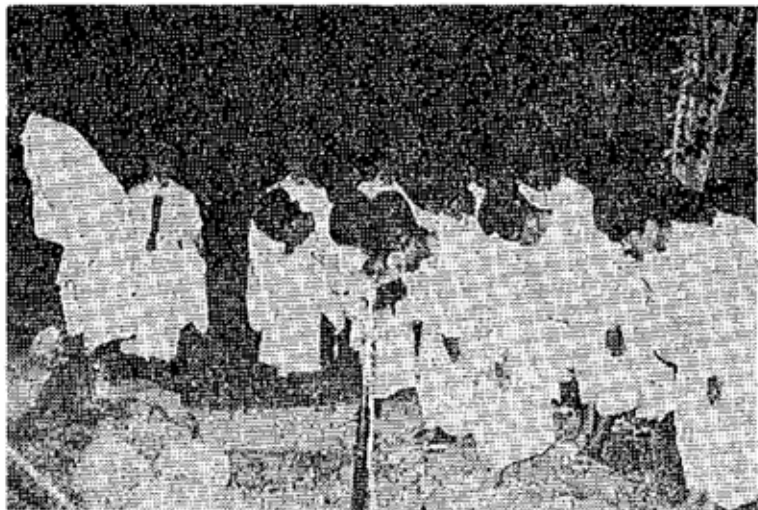
大鳥居 それとお詣りの仕方なども都会の人のお詣りする姿とまるで違いますね。作法はともかく非常に敬虔の念がこもった美しい姿ですね。感動しました。

北川 ほんとうの日本人の姿でしょうね。そこへ行くと本土の人は日本人の姿を失っているという感じがします。

蔵重 小笠原において宗教といえるものはどんなものですか。

滝 島民たちが帰化人といっている人たちは——老人が多いのですが——キリスト教の信者が多いようです。また、宗教建築といえるものは米軍が施設として作った教会と今度出来た大神山神社だけなのです。八丈島やその他から来た純粹の日本人の血を持った人はやはりお宮とかお寺を持ちたいということとは、心のふるさととして潜在的にあるようです。

司会 話は変わりますが、お祭りの模様についてはどうだったのですか。



松本 お祭りは階段の途中の踊り場の様な所にテントを張ってお飯舎を作り、そこから遷座した訳なのですが、わたしは大馬で一番先頭だったので、裏道の方は電灯がついて明るいのにひきかえ、階段の所は神秘的な程真暗で、また二百十段もあるというその階段が東京の倍ぐらいの高さの所もあるんです。そこを先頭で上って行って上りきったとき、人が大勢集まっていたのを見て初めて驚ろきました。それと同時に奉仕した我々も報われた気もしましたし、遷

座祭の大きな意義もあったとつくづく思いました。

大鳥居 とにかく我々が祭典を終わって神酒を各自に配っても、足りない紙コップを一人づつ回し飲みしているのです。それがまた自然なので感心しました。

北川 大鳥居さんとわたしが驚愕の所役で絹垣の前で奉仕したのですが、鈴を島の人に奉仕して

いただいたのですが、これが良いタイミングで振って呉れるんですよ。祭典をいつもやっているのならばともかく、初めての人のなかでいかに真剣に島の人たちが——十四人ですが——奉仕していたかがわかりますね。

大鳥居 白鳥の人たちの召立ての時の返事なんかも実に立派でした。

松本 実に熱心で真面目ですね。司会 年令的にはどうですか。

松本 白鳥として祭典に奉仕した人は大体年配の人です。滝 一番若い人で三十一才、年寄りで七十六才で、お祭りに集って来たのは小・中学生から老人まで広い層の人たちでした。

大鳥居 まあ全島あげてお祭りに参加したといえますね。

司会 そうすると今後の神社の維持運営とか、あり方については浜中 拝殿なんかもその内になんとか作りたいたいという話も島の人たちの間でありましたね。

北川 神社庁としては、ここまでは神社庁でやるがあとは島民自身で自分たちのお社を守っていてもらう。そうなれば専任の宮司さんを島の人たちの中から選ぶが、それ迄は特任の宮司を送るといった考えのようです。

大神山神社については小笠原諸島全体をお守りする神様であるという事を神社庁で説明し、皆さんに解ってもらった様ですから、これからは真の御復興が始まる訳ですが、それまでの基礎を神社庁で作ったということですから。これからは島民自身の手で持つて行かなければいけないんだという考えのようです。

大鳥居 例大祭の時に何か神賑のようなものを計画したらどうでしょう。島には娯楽といったものが何もないので、そういう面でも……

北川 今年の場合は八丈太鼓というのですか、大変遅くまで島の人たちが賑やかに叩いていまし

たね。

松本 今度の例祭の時には相模大会をやったという話を島の人たちがしていました。

大鳥居 あそこには神社の階段の  
中腹に要塞のあとというのか、  
防空壕のあとというのか解りま  
せんが、穴がいつばい空いてい  
るんですが、それが海岸線まで  
通じているとか、山の上まで通  
じているとかしているそうです  
が、観光開発が進んでくれば、神  
社が一つの資金源として見せる  
という方法もあるのではないかと  
島の人たちは言っていました  
司会 島の人たち自身が自覚をし  
て、自分たちで守りして行く  
んだというものが出来て来ている  
ことは事実なのでですね。

北川 それは非常に強いですね。  
滝 前にも言った様に何度か島の  
人たちと会合を持ったわけですが、  
先き行きの見通しは非常に  
明るいものに感じられました。  
大鳥居 奉祝祭のあと、二十五・  
六か三十才位の男の人が神社の  
お札をこちらで戴けるのですか  
と聞いて、五・六人尋ねて来ま  
したね。

浜中 ずいぶん熱心ですよ。  
北川 とにかく島の人たちは自分

たちの手で何とかしようという  
気持ちを持っていることは事実だ  
し、今回神社庁に協力して我々  
神青として六人が参加した訳だ  
けれど、来年は十人、二十人と大  
勢の人が行って御奉仕しあの手  
ばらしい空気の中で我々として  
教化運動を展開して行くのも一  
つの大きな仕事だと思えます。

松本 十一月一日の例祭日とい  
うのは問題ですね。  
北川 それについては神社庁側で  
は島の人たちと良く話し合いを  
して、相手の都合の良い時期に  
したいという意向はあるよう  
ですが。

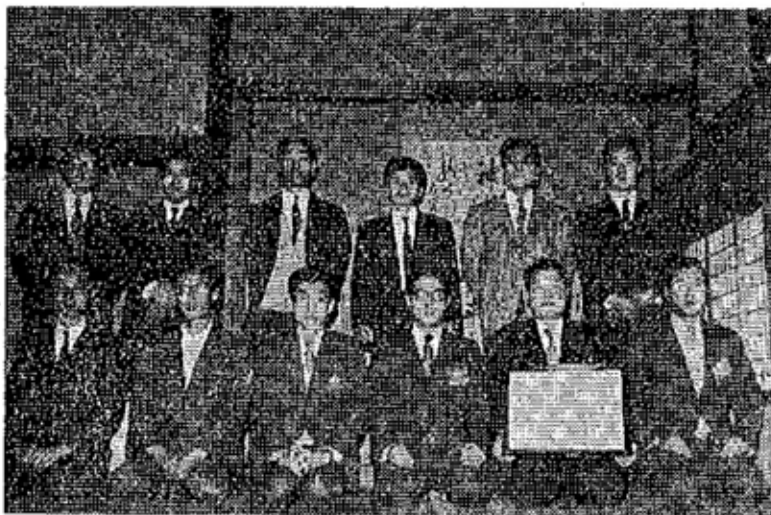
松本 島の人たちの中から宮司さ  
んが出れば問題はないでしょう  
が当面の間は……  
浜中 とにかく敬神の念が非常に  
あつく、御遷座する前からお賽  
銭をあげてお詣りしてました  
蔵重 それは日本に帰って来た  
という実感が、神社が出来て初  
めて涌いて来たといえるのでは  
ないですか。

北川 そうですね。とすると我々  
は非常に素晴らしい行事に参加  
させていだいたということが言  
えます。  
司会 大変有難うございました。

### 石川県神青に

#### 謝意を伝達

スモッグ濃い東京の空を飛び立  
ったYS11号は、デコボコ道を酔  
っぱらい運転の如く上に下に、右  
に左に機体が大きく揺れた。大荒  
れの太平洋に浮ぶ木の葉のような  
椿丸を思い出し気分が悪くなる。  
北川会長の顔も青い。椿丸では冷  
凍鮪よろしく四十五時間寝っぱな  
しの流君が元気なのは解せぬ。  
金沢小松空港には三上会長をは



じめ会員諸兄の出迎えを受けた。  
完成したばかりの北陸高速道路は  
素晴らしい。枯草に続く山々は既に  
真っ白。金沢総合庁舎前の石川県  
神社庁で早速大神山神社高橋宮司  
よりお預りした感謝状の伝達式を  
執り行う。北川会長より感謝状を  
受ける三上会長の緊張と喜懽の姿  
が印象的だ。

白山比咩神宮際の和田屋に投  
宿。夕食会には太田宮司も同席さ  
れ、暖い歓待に恐縮した。

翌朝白山比咩神宮正式参拝。拜  
殿に正座する我々に、北陸の厳寒  
が身にいくい込む。雷鳴と共に大粒  
の雹が社殿を叩く。「剣の舞い」  
を舞う巫女が美しい。宮司室で暫  
く閑談。太田宮司より有意義なお  
話しをうかがい、我々は秋と冬の  
境内を後にした。

金沢滞在中に、三上会長、河崎  
元会長をはじめ、奥能登から五時  
間もかけてお出迎えいただいた会  
員、並びに諸兄のなみなみならぬ  
歓迎に心から感謝する。

小笠原の件が一つの機会となり  
両神青会の結び付きがより一層堅  
く、深くなるのを覚え、我々は又  
酔っぱらい機のタラップを踏ん  
だ。  
(松本記)

## 小笠原大神山神社

## 御復興奉仕記録

滝 実

十月十八日(水)晴

大鳥居庁長始め神社庁関係者、北川会長以下神道青年会々員多数の見送りを受け、先発隊(新倉主事滝、浜中、山口、宮大工松島)の五名は、社殿、御復興記念碑と共に、午前十一時、東京竹芝棧橋を椿丸(一、〇一六トン)にて出航。一路小笠原・父島に向かう。東京湾を出ると共にうねりが大きく、船はピッチング、ローリングの連続のまま、伊豆大島を右に見ながら一路南下。夜半、八丈島を通過。

十月十九日(木)曇時々雨

終日船室にて冷凍まぐろさながらにごろごろする。相変わらず波高く、食堂に行く気にもならない。新倉、浜中、松島の三氏は比較的元気で三度の食事をする。午後三時頃、ようやくの思いで上甲板より海上の荒れ模様を八ミリに収める。寝っぱなしのせいか、背中や腰がいたい。

十月二十日(金)快晴

予定より五十分おくれて、ようやく目指す小笠原・父島列島に近づいた。朝日に輝く岩はだがきれいだ。空の色、海の色は全く素晴らしい。午前七時五十分、父島・二見港・くろしお岸壁に接岸。ふらつく足をふみしめ、足かけ三日ぶりに土の上におりる。船の中ではあまり感じなかった暑さを急に感じる。東京はそろそろ寒さをおぼえる時季だと言うのに。急いで木蔭に入る。さわやかな風に日蔭はとて涼しい。約一時間、棧橋付近で時を過す。着船の時には、あんなに人がいたのに、今はもうほとんどいない。宿舎小笠原会館迎



えの車でひとまず、宿舎にて休む。

約一時間程で、レンタカー(スズキジムニー)で棧橋へ向かう。既に社殿は船より積み出して岸壁に置いてあったが、あとの荷はさっぱりだ。じりじりして待っている間に、浜中、山口両君は早速大神山神社の視察に出掛けた。正面の参道は大分荒れているとの事。急に腹の虫がさわぎ出した。船でほとんど食事をしていないせいだ。

すこし早いのが、一同で食事に行くあじのたたきにみそ汁が胃袋にしみる程うまい。船の方は未だ荷おろしをしていない。どうも船のクレーンがこわれた為らしい。御齡三十五才の古いぼれ船だ。無理もない。しかしよく千軒も荒れた海を走って来られたものだと思心をしてる内に道路工事のクレーン車が来てどうやら荷おろしが始まり、社殿も山に運ぶ準備が出来た。が裏参道は生い繁った木にはばまれ、路面も悪く、とてもトラックでは上がれない。思案の末馬そりのようにして、ブルトーンで引っぱり上げる事にし、十六人の人夫が社殿にへばり付き、悪戦苦闘の末、一時間余り掛かってようやく山上に持ち上げた。後は

作業も順調に進み、あらかじめ、

しつらえられた土台に社殿を据え付け、ポルトをうめ込む。続いてブルに運ばれた記念碑もブルと十人の人足で一時間程で建立したさすがに日も西に落ちかかり、一同宿舎に引き上げる。夕食後、荷物の確認をする。三日振りの風呂に汗を流す。昼間は三十度近くあっただろうか。

十月二十一日(土)晴時々雨

午前十時、小笠原支庁を訪門。支庁長に來島のあいさつをする。世話人の山崎さんの話で、支庁長手づから境内の清掃をされたとの事とても本土のお役人には出来ない事だ。よくお礼を申し上げた。そう言えば、支庁の職員の人達(特に村民課)は、いつでも土方仕事が出来る様なかつこうで机に向かっている。千葉県のどこかでマスコミにさわがれたなんでもやる課とやらがあったが、ここでは日常茶飯事の事の様だ。午前十一時より境内にて新倉主事奉仕により清被式を執行。我々も御遷宮の滞りなき事を祈念して玉串を奉る。ガンバラナククチャノ!

午後は仕事も一段落したし、宮大工の松島さんの送別を兼ねて、島

内めぐりに出発。最初に寄った貞頼神社跡にはこの七月島民が再建の祈りを込めて行なった祭りの後が残り居り、島民の熱意がひしひしと感じられる。途中スコール模様の雨にあたりしながら、約三時間半程で島の主要部をめぐった。思いがけない島内めぐりに松島さんはとても喜んでくれた。午後七時から、村民会館にて大神山神社関係者と会合、経過報告と行事日程の打合わせ、協議を行なう。午後十時、松島さんを棧橋に見送る。予定では夕刻五時の出航だが、我々が乗った便で、行方不明者が居り、その捜索の為、出航時刻が変更されたとの事。何はともあれ、五色のテープで(但し他人のテープを無断でちよん切つて)無事帰京を祈る。

十月二十二日(日)晴時々曇

搬入資材の点検と日程行事の細目に就いての検討、打合わせ、横幕のぼりの準備に午前中を費やす。午後、大神宮山の視察、調査を行なう。夜は支庁にお勤めの辻さんのお宅におじゃまして、めずらしいものを沢山御馳走になった。辻さんは人柄温厚な方で、将来の宮司候補とかもつぱらの評判である

十月二十三日(月)曇一時雨

遷座祭のポスター作成、必要資材の購入など細々とした仕事が多く万一もれがあつてはと細心の注意をし、確認をし合いながら仕事をす。夜は貞頼神社関係者と懇談現状の説明と質疑応答をかわすと共に大神山神社御遷宮の協力方を申し入れたが、心よく引き受けていただき、八丈太鼓の奉納を約束してくれた。

十月二十四日(火)曇一時雨

今日は世話人の一人が、漁船で我々を島めぐりに連れて行ってくれる予定であつたが、生憎く船の調子が悪く断念。午前中は日程行事と、島民奉仕者の役割編成等をする。午後は境内清掃ののち、島の南部の撮影に出掛けた。

十月二十五日(水)曇一時雨

新倉さんが日程、行事、役割表を印刷する為、支庁に行っている間我々はこのぼり横幕用竹竿調製作業を行なう。島には竹がふんだんにあり、太いものから細いもの迄おもいのまま手に入る。お蔭で立派なものが出来た。今頃は本隊が東京を出発した頃だ。準備を急がねばならない。午後は社殿周囲の石垣作りをする。浜中君が器用に正

面石段を作った。素人にしては良い出来だ。夜、島民奉仕者に渡御の所役の作法などを指導する。皆熱心で夜の更けるのを忘れる程だこの分では遷座祭でも立派にやれるだろう。

十月二十六日(木)曇時々雨

いよいよ御遷座祭も明日にせまつた。祭具の運搬、縄張り、天幕張り等諸準備にいそがしい。島民とも最終的打合わせも済ませ、あとは御神体をお迎えするばかりだ。夜、食事中に椿丸から電報が入った。「アスサイテンオワリシダイカエルヨテイテハイタノム」。



我々には判断出来ないままに明日の出迎え準備をしている所へ、船とアマチュア無線家が交信し、我々を呼んでいるとの事。その結果台風が発生し、出航が変更になる恐れが出てきたと判明した。兎に角明日の入港を待つて判断することになった。こちらは台風のケもないおだやかな天候だ。

十月二十七日(金)快晴

台風の影響全くなし。四時半起床直ちに棧橋に向かい、新倉、山口両氏は奉迎船乗組の手はずをする。残る我々二人は、リーダー塔に直行。椿丸はもう一軒沖合を港に向けて航行中であつた。撮影後すぐに棧橋に車を飛ばす。接岸正六時途中おだやかな航海に全員元気だ一般の下船後、御神体は一時宿舎に奉安された。八時より日程打合わせ、十一時昼食、十二時より境内にて習礼の後、島内視察をするこの間、先発の三氏(小生を除く)は最終的祭典準備を行なう。四時半の夜食後、津戸氏によって御神体を仮殿にお移しし、一切の準備が整った。かくして正七時、御遷座の儀は盛大な中にも厳肅に執り行なわれ、島民奉仕者の立派な御奉仕振り、一般参列者の敬虔な態

度の内に滞りなく終了した。

十月二十八日(土)曇のち雨

台風接近の為、予定を二時間繰上げ、午前八時より奉祝祭、除幕式を行なう。この間に椿丸の出航は延期と情報が入る。九時半より小笠原会館にて祝賀式が行なわれ、有井建設、装束商組合に次いで、我が会と石川県神道青年会に大神山神社より感謝状が贈られた。全ての行事が終了し、一同ほっとしている所へ雨と風がはげしくなり台風が近づいて来た。外へ出る事も出来ず、思い思いの時を過す。

十月二十九日(日)雨のち晴

相変わらず風雨が強く、午前八時には瞬間最大風速八十米を超えたとの事。宿舎の玄関前のがけに滝の様な流れが出来た。午後次第に風雨が弱まり、夕方には晴間が見えて来た。何人かの人達は棧橋に釣りに出掛け、一時間位の間に七八匹のボラを釣って来た。夕食はボラをさかなに、祭典の無事終了を祝い、同宿者と共に最後の夜を大いに飲み明かした。

十月三十日(日)快晴

椿丸の出航は正午と決定し、十時より全員大神山神社に参拝ののち棧橋にて乗船手続きをすませる。

多数の島民の見送りに再会を約し無数のテープの中、正午父島を離れ、東京に向かった。遠ざかる島影に別れをおしんでいる内に、台風之余波で船が大きくゆれ出し、早速、往路同様冷凍まぐる作戦に入る。

十月三十一日(火)晴

終日冷凍まぐる作戦を続行。

十一月一日(水)晴

午前八時頃東京湾内に入り、ようやく船のゆれがなくなる。これにて作戦終了。相変わらずの東京の空と水の色がなつかしいやら、うんざりするやらしている内に、竹芝棧橋に到着。九時半接岸。二週間振りの帰京に、多数の出迎えの方々の顔がなつかしい。皆様に無事任務を完了した旨ごあいさつし午取十時迎えの車で帰宅する。ああ流石に腹がへった。



### 編集後記

昭和四十七年の師走も目の前に迫り、十二月十日に投票の行われる衆議院議員立候補者の乗る車が大きなスピーカーの音を立てながら走り回っている。

この「やくわえ」特集号が出る頃には、日本の新しい政治体制が生れていることだろう。

われわれは斯道に理解のある党人が多く選出されることを望んでいるが……。

役員会、委員会決定されて、この特集号が発行されることになったが、年の瀬も押しつまってからのこと、編集自体も思うにまかせず、気だけがいらいとすただけであったが、現地へ行って御奉仕して来た人達のことを思い、何とか纏め上げては見ました。が、印刷が上って見た時、多分不満足だらけであることだろうと思われるが、これも能力のしからしむるところ、平に御容赦願う次第である。

此度の小笠原大神山神社御復興については、正副会長をはじめ色々書かれてはいるが、東京都神社庁をはじめ、都神青の広報により、もう少し全神職に徹底を図り都内の神職がほんとうの意味に於いて一丸となった運動であったらと思われる。これは、今後こうした大きな仕事、運動を成功させる意味で考えて行く必要があるのではないだろうか。

都神青は北川会長の下、全役員委員が協力体制を築きながら、着実に進んで来ている。今回の大神山神社御復興に関する都神青の運動がほぼ成功裡に終わったのもその現われの一つである。

後記の終りにあたって、この特集号発行に協力された方々に感謝申し上げると共に、現地に行かれて、身をもって御奉仕された方々に深い敬意を表します (神尾)

昭和四十八年一月十日  
東京都神道青年会  
東京都港区元赤坂二二二一三  
東京都神社庁内  
電話(408)二三六一・九二七七